

## へき地で働く医師を目指す

徳島大 河南真吾さん(26)

徳島大学医学部6年の河南真吾さん(26)は、徳島市南佐古七番町に生まれ、徳島大へき地医療を支える医師を目指している。

医師国家試験に合格した後、あらゆる病気に対応する「総合医」になるための研修を受ける。そうした医師を養成するために同大病院が新設する「卒後臨床研修プログラム プライマリ・ケアコース」の、ただ1人の志願者だ。外科や眼科などの専門医を目指す同級生が大半の中、決断を後押ししたのは「医療を介して人と深くかかわりたい」という強い思いだった。

河南さんは、幼なじみの父親が産婦人科のクリニッ

# 人と深くかかわりたい

クを営んでいて、その姿にあこがれて2001年に徳島大に入学した。新しい命を介して人に幸せを運ぶ

ことに魅力を感じ、そのクリニックで働くことを目指していた。その気持ちも、全人的に診療できる総合医へと傾き始めたのは、昨年5月、実働町や那賀町の診療所で泊まり込みの実習を経験したことがきっかけ。そこで目の

当たりにしたのは、地域に溶け込み生き生きと働く医師たちの姿だった。「田舎を高度医療ができない言い訳にしない、という先生たちが格好よかった。田舎の医療に対する偏見が消えた」と振り返る。とはいえ、決断には大き

な迷いもあった。河南さんは千葉県出身。故郷のある関東で産婦人科医になるか、徳島に残って地域医療を支えるかで、人生はまったく違うものになる。だが、一番やりたいことを考えたとき、浮かんだのは「医療を介して人と深くか

わりたい」という答え。実現できるのは、患者の生活の一部になり、その家族も支える地域医療だと思

った。河南さんは、2年次から2年間休学して宣教師として関東で活動したことがある。時には人の悩みや苦しみを引き受けたその経験も、決断を後押しした。

「この人の健康は自分が守る、と言えるような医師になりたい」と力強く話す河南さん。その第一歩を踏み出すべく、14日から始まる医師国家試験に向けラストスパートを掛けている。



へき地医療に貢献する医師を目指している河南さん。徳島大